広報なか

No.100
●発行日／平成25年５月13日発行
●発　行／那珂市
●編　集／秘書広聴課
広報グループ
〒311ー0192
茨城県那珂市福田1819ー5
●ホームページURL（携帯可）／
http://www.city.naka.lg.jp
●メールアドレス／
hisho-k@city.naka.lg.jp

2013
5

目次
CONTENTS

2 第1次那珂市総合計画 後期基本計画を策定しました
4 八重桜まつり
6 「ひまわりタクシー」運行開始
7 全国瞬時警報システム（J-ALERT）
8 水鳥
13 大宮地方環境整備組合測定結果 防災倉庫を設置しました
14 地籍調査にご協力を
15 「ふるさとづくり寄付」を 募集しています
18 那珂市消費生活センターです
19 那珂市内放射線量の測定状況
20 まちの話題
22 Information
24 市立図書館だより　ほか
26 さわやかさん、表紙の裏側　ほか

鮮やかな光に彩られた八重桜（八重桜まつり）

水鳥 17

歴史的遺産の宝庫「額田城跡とその界隈」
―額田昭通と伊達政宗の密書―

額田地区の歴史的遺産の中心は、何と言っても額田城跡である。額田城は、太田佐竹氏の出城的存在として鎌倉時代に築かれたが次第に力をつけて独立的存在となった。やがて本家の後継者をめぐって本家と対立、長く抗争を続けたが敗れ、応永30年（1423）ついに滅亡した。

その後には本家の家臣小野崎氏が入り、額田小野崎氏を興した。その小野崎氏も水戸の江戸氏と縁組みしながら勢力を拡大していった。戦国時代の額田城の縄張図を見ると、その規模の広大さが想像される。やがて額田小野崎氏は、本家佐竹氏と姻戚関係の江戸氏を除こうとしてひそかに奥羽の伊達政宗と交信をもった。一方、南下を目指す政宗にとって大きな壁は太田佐竹氏であった。額田小野崎氏の思いと伊達氏の野心が一致した。太田佐竹氏を挟み撃ちしようとの謀である。

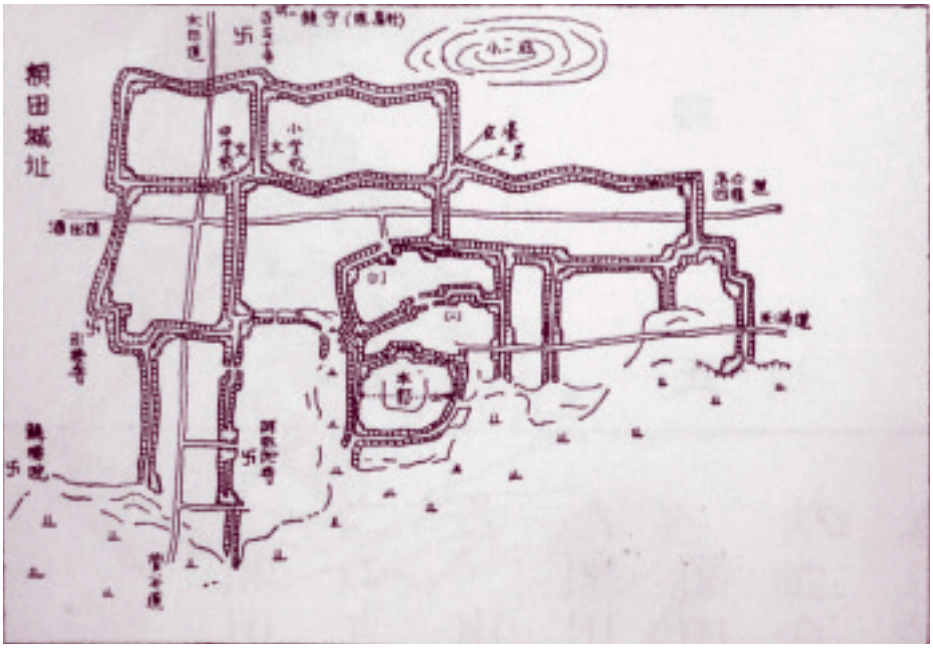
政宗はしばしば書状を額田小野崎彦三郎昭通に与えてその実現を図った。昭通には水戸の江戸氏攻略をそそのかし、実現の暁にはその領地の一部を進呈しようとの約束までしていた。それが今回発見された天正17年（1589）10月晦日付け政宗の「密書」（起請文）である。

伊達政宗が送った密書
（菊池恒雄氏蔵）

しかし、額田昭通が本家に攻められたころ、政宗は地元会津周辺の抗争が激しくて援軍を出せず、天正19年（1591）2月、額田城はついに陥落した。敗れた昭通は政宗の下に走り厚遇を受けた。落城した額田城跡は江戸時代を通して保存され、深い堀と高い土塁を持つ戦国時代の俤を今日に伝え、現在歴史的自然公園として整備されつつある。

額田昭通は伊達家から越後高田の松平忠輝の家臣となり、さらに初代水戸藩主徳川頼房に額田九兵衛照通として仕え譜代の上級家臣として藩政を担った。「鳴きうづら」や「鷹」の絵師としても知られる。

なお、額田小野崎氏・江戸氏とも、源氏系の佐竹氏とは異なり、藤原氏系である。



額田城の縄張図（『わが郷土』より）

現在の額田城跡

額田東郷

字伊達には伊達古墳群がある。この字名は後世名付けられたものである。はたして伊達家との関連があるのだろうか。地元では、伊達氏家臣の屋敷（陣屋）が置かれた所であり、そこから北方太田の佐竹氏を監視していたのであると伝えている。事実とすれば額田氏と伊達氏との提携を示す証しともなる。この伊達古墳から出土した舟型石棺は貴重である。死者の魂が船に乗って昇天するという呪術を示し、また特殊な石棺に葬られる地位の高い人物が住んでいたことを意味するものである。額田地区は、久慈川に沿う台地だけに住居跡や古墳が多いのも自然である。

舟型石棺
（歴史民俗資料館展示）

字永井には不動尊があり、そこに流れ落ちる小滝の清水は名水で知られる。この水で患った眼を洗い不動尊に祈ると不思議に治ると評判になり、近隣からの多くの人々で賑わったという。

日本赤十字社従軍看護婦秋山美代も出ている。明治41年（1908）に日本赤十字社の看護婦となった美代は、大正9年（1920）のシベリア出兵には極寒の地で、昭和12年（1937）の日華事変には病院船に搭乗して、いずれも救護班看護婦長として戦傷病兵士の看護に奮闘尽力した。患者に対する懇切な看護、部下看護婦への指導統率は抜群であり、日赤本社からは「ナイチンゲール石黒記念牌」が贈られた（茨城県では11人）。日本と中国との紛争が続く昭和14年（1939）10月26日、無念にも戦陣に散華した（51歳）。勲八等宝冠章を授与され、地元では村葬をもって報いた。墓所は上宮寺（本米崎）にある（法名：報国院釋尼妙蓮大姉）。

在りし日の秋山美代

元有ケ池の辺り字岸桂寺には芭蕉の句碑「松風の落ち葉か水の音すずし」がある。寛政5年（1793）10月、芭蕉の百回忌にあたり額田の俳人仲間の指導者中嶋五峰が建立したもので、地域の文化度の高さを見ることができる。

芭蕉の句碑

字柄目は額田城の搦め手から来る名であり、その地域からは室町時代の遺物とされる常滑焼の破片が出土している。土塁上には市の天然記念物「鈴木家のヒイラギ」がそびえている。トゲが危ないヒイラギの葉も、時代を経ると丸くなり扱いやすくなる。何となく人間と同じようであり、ある種の不思議さがある。

額田北郷

額田駅の西に光照寺（浄土真宗）があり、その下の崖はナカマチクジラの化石が発見されたところである。縄文海進により太平洋が内陸部まで広がっていた往時を想起させる。

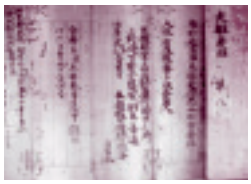
鹿嶋八幡神社
（額田神社）

鹿嶋八幡神社は、元は別々に祀られていたのであり、両社とも額田氏が崇敬した神社である。鎌倉時代初期に額田を訪れた文覚上人は、源頼朝の祖父為義の念持仏であった大日如来を森戸の宝光院に奉納したが、その際この地に神社仏閣が少ないことに気づき、八幡社・鹿嶋社・熊野社・稲荷社・北野社（天満宮）の五社を勧請したという。しかし、社伝には鹿嶋社は平安時代初期に創建され、八幡社は源義家が祀ったものとある。徳川光圀がこれらを合祀し、額田神社と命名した。奥には両社の本殿が揃って合祀されてあり、境内には光圀お手植えの榊が大樹となっている。拝殿には明治初期に奉納された比類ないほどの大型の神鏡が供えられ、扁額「額田神宮」は水戸藩の碩学會澤正志斎の書である。社号は明治に入り、鹿嶋八幡神社となった。

神社の大祭は「額田まつり」の基幹としてあり、近隣にない荘厳な祭事となっている。祭りには上之町・古宿町・柄目町・新地町・本後町などの山車が繰り出し賑わいを添える。山車は幕末から明治にかけて彫刻されたもので、「神功皇后と武内宿祢」など歴史物語を題材としたものから昇り龍など多様華麗、見事なものである。地元では山車倉を建てて保存に努め、古宿町に一棟一台、神社境内には二棟四台が保管されて事前依頼により見学が可能となるよう配慮されている。参道には西の横綱といわれる樹齢500年からの山桜があり、途中から生えた若木が美しい花を咲かす。社宝の木造・陶造の狛犬は、市の指定文化財である。

額田まつりを盛り上げる山車

参道沿いの毘盧遮那寺（真言宗）の本尊は大日如来（毘盧遮那仏）、寺の名は本尊名から付けられたものである。寺には額田城主小野崎善通（義通）が一族の繁栄を祈願して奉納した大般若経の書写経典600巻（新造を除き茨城県指定文化財）が伝承・保存されている。明応4年（1495）から5年の歳月をかけて写経されものである。毎年正月16日には、寺の観音堂内で国家安穏・五穀豊穣を祈願して大般若会が厳かに行われる。



大般若経の書写経典（上）と、大般若会の様子（下）

崩すことはできなかった。父子敬愛の教えである。寺門家には、その時の枕屏風や斉昭の書が保存されている。那珂町の初代町長を務めた治平の日記は、戦中戦後の記録として貴重である。

額田南郷

鈴木家住宅は、元佐竹氏の家臣で太田天神林から移り繰綿商い（紅花商い説もある）で富豪となった家であり、義公光圀の養女万姫が嫁した家として知られる。義公や歴代藩主が迎えられた元禄期の書院（茨城県指定文化財）が残っている。光圀時代手植えの双樹のモチノキ（市指定天然記念物）も珍しく、さらに書画ともに優れた七代目の鈴木梅岡が残した「鈴木家記録」や地元の塾師匠原好宜軒の肖像なども貴重な歴史資料である。万姫の墓は、阿弥陀寺墓地内にある。

銘柄「龍門」で知られた寺門酒造、残された白壁の土蔵が美しい。明治26年（1893）庄屋であった寺門治平宅を最後の将軍であった徳川慶喜が訪ね宿泊した。母徳川斉昭夫人登美宮を瑞龍山墓地に埋葬した帰途である。治平は床の間の部屋に斉昭の書を掛けて迎えた。安座を勧めても正座を続ける慶喜に、ハッとして掛け物を替えた。安堵してくつろぐ慶喜、父（の書）を背にして膝を

鈴木家住宅

引接寺（浄土宗）は義公光圀が向山浄鑑院常福寺の末寺としてもうけた浄土宗の寺であり、本尊阿弥陀如来と脇侍の三尊（茨城県指定文化財）は、高萩の八幡社から移されたものである。境内には、光圀の兄で初代高松藩主頼重の夫人皓月院を祀った供養地蔵像がある。皓月院は大老土井利勝の娘お万の方、光圀の養子で水戸藩三代藩主綱條の母である。綱條が母を思い高松から分骨して向山浄鑑院常福寺に埋葬建立した地蔵像であったが、寺が天狗諸生の争乱で焼かれたことにより末寺であった引接寺に移されたものである。また、ほら吹き名人「たっつあい」や塾師匠原好宜軒、徳川家康から「慎重第一の家臣」と称えられた天野康景の子孫の墓がある。

供養地蔵像

阿弥陀寺（浄土真宗）は、大山御坊（城里町）で親鸞から教えを受けた定信の流れを組み、明徳2年（1391）に額田に移り、その後小野崎氏が守護した寺である。天正4年（1578）に起こった大坂石山本願寺と織田信長が対立した石山合戦の時には、常陸の真宗門徒は阿弥

陀寺に集まってから石山へ向かったといわれる。本尊木造阿弥陀如来立像は茨城県指定文化財、親鸞の直弟子を記した太祖聖人面授口決交名記は市指定文化財。幕末期建立の鐘楼型楼門と、義公御手植えとされる枝垂れ桜との構図はすばらしい。

阿弥陀寺の鐘楼型楼門と枝垂れ桜

鱗勝院（曹洞宗）は、元徳2年（1330）に額田城主の菩提を弔うために城内に建てられたが無住となり、その後、初代の額田城主佐竹義直の父・義重の菩提所として文安2年（1445）現在地に再興した。境内には享保2年（1717）に建立された義直の供養塔と額田氏のものと見られる宝筐印塔がある。坂下の旧道から山門へ上がるアプローチは禅宗寺院らしい格別な雰囲気がある。

宝筐印塔

浄鑑院常福寺跡

寺は、額田城跡の南方、旧有ケ池向う台地上那珂二中付近にあった。徳川光圀が水戸藩創始者である武田信吉の菩提を弔うために建立したものである。京都の知恩院境内に似せた雄大な伽藍をもち、200余人の修行僧を擁した深山幽谷の寺院は、歴代藩主が太田瑞龍山墓所参拝の途次に参詣して賑わったという。幕末期、吉田松陰も水戸滞在中に参詣している。天狗諸生の争乱で焼失し、跡地の一角には歴代住職数人の墓碑が残っている。

歴代住職の墓碑

二本松藩士の塚碑は田彦街道沿い坂下にある。元治元年（1864）9月、額田原において天狗諸生の争乱があり、天狗勢鎮圧のために幕府方として派遣され戦死した二本松藩士を供養しようと地元民が建てたものである。心温まる史跡である。

二本松藩士の塚碑

歴史を生かしたまちづくり

このほか、地区内には多くの歴史的遺産があります。市内外からの訪問者も期待できることでしょう。それぞれの良さを生かしながら総合し、魅力と活力に満ちた城下町を目指したいものです。

『大般若経信仰の世界』が発刊されました

那珂市史編さん委員会では、昨年度刊行した『那珂市域の社寺祠堂』の姉妹編として『大般若経信仰の世界』を刊行しました。日本では古来から鎮護国家・五穀豊穣の願いを込めて大小の寺院において大般若経の転読が行われてきました。今日まで伝えられてきた那珂市内に残る経典の内容と意義および文化的行事を紹介するものです。

内容は、(1)大般若経信仰について、(2)毘盧遮那寺の大般若経（茨城県指定文化財の概要、額田小野崎氏の系譜と奉納、経典の奥書と補修の概要）、(3)那珂市内の大般若経と大般若会、(4)毘盧遮那寺大般若経一覧などで構成されています。

◇形状　A4版　177頁
◇定価　1冊　1000円

《申し込み》
歴史民俗資料館
☎297・0080